

【研究ノート】

ボリビアのイスラーム： 少数派としてのムスリムの現状と生き方についての一考察

小村 明子[†]

1. はじめに

本研究の目的は、異文化社会、特に中南米という、イスラームが生まれムスリムが多数派となる中東から地理的に遠い地域におけるイスラームの現状およびムスリムたちの生き方の実情を知ることにある。またそれによって、イスラームの土着化あるいは伝播を見ていくことにある。そこで、本研究ノートでは、その一例として南米大陸の内陸に位置し、国の全人口比率から見てもムスリム人口が少ない国、ボリビア多民族国（以下、「ボリビア」と記す）に焦点を当てることにする。

一般に、中南米ではキリスト教カトリックが信仰されている。だが近年ではプロテスタント、いわゆる福音主義もまた信仰されていることが知られている。それ故、多くの日本人が「中南米にイスラーム教徒（以下、「ムスリム」と記す）がいるなんて」と疑いの目を向けるのは当然のことなのかもしれない。

だが、そもそも南米大陸におけるイスラームの流入は、近年のブラジルを中心とした南米経済の発展に伴う移民の増加によって始まったことではない。それは17世紀のヨーロッパ各国の植民地政策によるムスリムたちの移住から始まり、19世紀から20世紀初頭の中東、とりわけパレスチナ地域からムスリムたちが移民として北米も含めたアメリカ大陸へと渡ったことによるものである。

こうした人の移動に伴う宗教・文化の伝播は、国や地域の社会状況を反映しつつ現地の改宗者や移民の子孫によって、長い年月をかけてその国や地域の伝統宗教や文化と融合して土着化していく¹⁾。しかしながら、同時に最近の傾向としてインターネットを通して特定の地域を超えたイスラームの共有も見られる（Roy 2004）。中東から遠い地域、例えばヨーロッパやアメリカなどで生まれ育ったムスリムたちもまた、インターネットおよび衛星放送などのメディアを媒体としてイスラームを知る。そこにはそれまでの人の移動に伴う宗教の伝播によるものでもなく、また地域の文化と融合もしない、メディアを通して教授された全く新しい手段によるイスラームの伝播とみなすことができよう。

本研究テーマに関して、筆者の知る限り、先行研究と言えるものは非常に少ない。敢えて述べるならば、(Asbún-Karmy L, A. 1993) や (Osterweil 1998) のように、ユダヤ人およびアラブ人の移住の歴史の中で、ムスリムの状況が論じられているものがいくつかある。したがって、中南米とくにボリビアにおけるイスラームの歴史に関しては、こうした関連文献を参考にした。また最近の動向に関しては、インターネットで公開されている情報などを参照した。その上で現地調査を行い、非ムスリムの人びとも含めた現地の人びとから多くの情報を得た。本論ではこれらの調査結果を踏まえて考察する。

なおフィールドワークについて述べると、筆者は2006年から2011年までの期間に複数回ボリビ

[†] 立教大学社会学部兼任講師
5559480@rikkyo.ac.jp

アを訪れ、現地のモスクヤムサッラー²⁾での調査を行った。

2. 中南米のイスラームについて

本題に入る前に、まずは中南米のイスラームの状況について触れる。中南米のムスリム人口は、表1および表2のようになる。

表1は、中南米におけるムスリム人口である。表1を見ると、中南米でムスリム人口が最も多い国はアルゼンチンである。なぜアルゼンチンにムスリムが多いのか。その理由としてこの国におけるイスラームの歴史がかなり古いことを挙げることができる。

アルゼンチンのイスラームは、16世紀にスペイン人征服者と共にやってきたムーア人によって始まる。その後20世紀初頭に、中東（主にシリアやレバノン）からの移民がアルゼンチンに流入した。彼らの大半はカトリックあるいはユダヤ教

徒であった。しかしそれでもこの時のムスリム移民が定住し、現在のムスリム・コミュニティの基礎が築かれることになる。

今日では80~100万のムスリムがアルゼンチン国内に存在すると言われる⁴⁾。これはアルゼンチンの全人口の約2%にあたる。アルゼンチンは伝統的にカトリックの国であるが、中東のイスラーム諸国と友好関係にあり、ムスリムに対しても極めて好意的である。例えば、南米最大のモスクであるキング・ファハド・イスラーム文化センターは2000年に開堂した。このモスク建設はサウジアラビア王国の資金によるものである。さらに、カルロス・メネム元大統領⁵⁾の存在はアルゼンチンのイスラームの拡大に貢献している。また、アルゼンチンには非常に大きなシーア派のコミュニティ⁶⁾がある。

一方、表2について、スリナム共和国（以下、「スリナム」と記す）が国の人口比率から見ると、南米で一番ムスリム人口比率が高い。ムスリム人

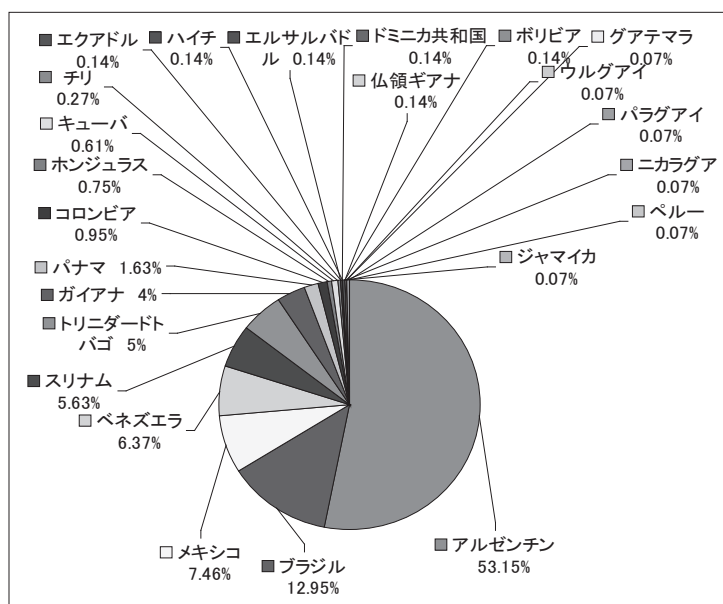


表1 中南米におけるムスリム人口

出典：The Pew Forum on Religion & Public Life (ed.) 2009³⁾ より、小村明子作成

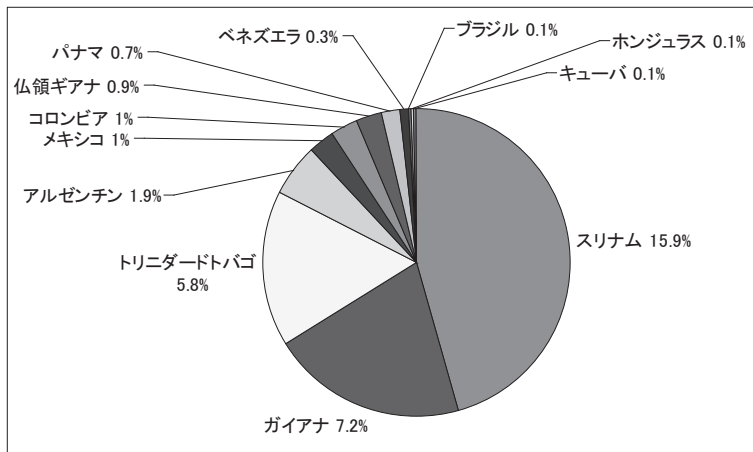


表2 各国の人口比率におけるムスリム人口比

出典：The Pew Forum on Religion & Public Life (ed.) 2009 より、小村明子作成

口自体はアルゼンチンやブラジルほどでもないが、国の人口比から見ると、ムスリムは15.9%にも及ぶ。

スリナムでは17世紀からオランダが植民地支配を行っていた。1860年代に奴隷制が廃止されると、スリナム行政はプランテーションにおける労働力を維持するために、当時オランダが同様に植民地にしていたインドやインドネシアなどから毎年のようにムスリムをスリナムに呼びよせた⁷⁾。例えば、スリナムにきたインドネシア人はジャワ島出身が多く、33,000人にも及んだ。またその内約1万人がインドネシアに戻り、それ以外の者はスリナムに留まったという (De Waal Malefijt 1964: 149)。その結果、現在のように南米において国の人口比率におけるムスリム人口が一番多くなったのである。

北米を含むアメリカ大陸におけるイスラームの流入は17世紀から始まるアメリカ大陸におけるヨーロッパ各国の植民地政策の中で、奴隷として連れてこられたアフリカ系ムスリムやその後の植民地運営の中で労働力を分配した結果、母国から労務のために移住したムスリムたちによってもたらされたものであった。

例えば、北米やメキシコなどにおけるイスラームの流入は、その当初アフリカから奴隷として連れてこられたアフリカ系ムスリムによるものであった。この時期のアフリカ系ムスリムたちの中には、知的で読み書きなどの教養を持つ者や複数の言語ができる者などがいたが、彼らは、人としての威厳や尊厳を表に出すことは一切禁じられるか、無視されるかのどちらかであった (エック 2005: 456-64)。

だが、後にこの奴隷制度が廃止されることによって、プランテーションなどで労働力となるための人手が不足していった。そこでこの問題に対処するために、ヨーロッパ各国はスリナムの例のように、植民地間での人の移動を行うようになったのである。

19世紀半ばから20世紀になると、中東地域 (とりわけ、現在のシリアやレバノン) からキリスト教徒やユダヤ教徒そしてムスリムといった多くの人びとが商売⁸⁾のために北米を中心にアメリカ大陸へと流入した。彼らの多くは織物などを扱う行商人として各地を移動しながら働いていたと言われている。また彼らは行商という短期的な滞在を予定していたが、商売の安定と移民先での

家族の形成に伴って次第に定住していくこととなった。

こうした移民の増加によって、新たにイスラームが中南米にもたらされることとなった。しかしながら、ムスリム移民の数の少なさ、移住地ではキリスト教が優勢であることなどを理由として、イスラームの教義の実践などから、イスラームが新天地に強固な基盤を築くことが難しく、それ故に国や地域によってはコミュニティさえも構築することができなかった。ムスリム人口が増加し、モスクが建設されムスリムが市民権を得るようになったのはここ近年のことであるが、それでも国や地域によって人口比率のばらつきが見られる。

このことから、中南米のイスラームは大きく分けて2つの潮流があると言える。一つはヨーロッパの植民地政策による労働力補充に伴うムスリムの移住であり、もう一つは1800年代中頃から始まった、主にビジネスの新天地を目指した人びとによる自発的な移住である。だが、近年においてはその潮流に新たな一つを加えることができるだろう。それがインターネットによってイスラームを知り、改宗に至るケースである。この近年の新たな潮流はムスリムが少数派となる国や地域、とりわけムスリム・コミュニティの存在が不明確な地域においてはどのような影響を与えるのだろうか。

そこで、表1および表2においてムスリム人口数の少ない国の中で、南米の内陸国であるボリビアを事例に取り上げ、その現状およびムスリムの在り方を以下、分析・考察する。

3. ボリビアのイスラーム

3.1. ボリビアのイスラームの歴史について

南米社会では、キリスト教（特にカトリック）が主流な宗教である。ボリビアにイスラームが入ってきたのは、19世紀末のことである。それも、移民としてパレスチナ人が入ってきたことにある。Luis Alberto Asbún-Karmyはボリビア人

であるが、約150年前にボリビアに移民した祖先をもつ、パレスチナ系バプテストである。彼はパレスチナ系（特にヨルダン系キリスト教徒）移民について、20年以上に渡って移民研究を行っている。また彼は自身の著書（Asbún-Karmy, L., A. 1993）の中で、先祖はムスリムであったが、世代交代によってキリスト教へ改宗した家族がいることを指摘している。その証拠はボリビアへ移住した最初の家族の中に、名前が「アブドゥッラー」と言う人物がいたことからだとする。なおAsbún-Karmyによれば、オスマン帝国時代に迫害されたパレスチナ人が安住の地を求めて南米に移り住んだが、約95%はキリスト教徒で残りの5%がムスリムであると言う⁹⁾。

サンタクルス市内にあるモスクのホームページによれば、ボリビアの場合、19世紀末の移民から1989年に国から公式に認められるまでは、確固としたムスリム・コミュニティが存在していなかった。だが、同モスクが発行した資料によれば、現在のボリビアのイスラームは現地の宗教と融合することなく、中東やその他のイスラーム地域において実践されているイスラームを保ちつつ拡大していると言う（Centro Islámico Boliviano ed. 2004: 2）。

2008年調査時にラパス在住のボリビア文化庁関係者にボリビアのイスラームについてインタビューした。ボリビア国内のムスリムの数が増加するようになったのは、5年くらい前からであると言う。彼によれば、アラブ人、とりわけレバノン系のパレスチナ人が多く、彼らのほとんどが織物業で入ってきたと言う。なお先進国では移民が国内で商売を行うのに多くの規制を布いているが、ボリビアでは調査当時商売のための国の規制などはないと言う。

また近年では、イランとボリビア政府との関係が強くなっている¹⁰⁾。その理由の一つは、イランが南米の豊かな天然資源に着目しているためであり、ボリビアだけでなく、石油埋蔵量を誇るベネズエラやウラン鉱脈を持つブラジルとの関係性

も強化していることがあげられる。

イランとボリビアとの協力関係を示す一例として、イランの資金で建てられた病院（赤新月病院）があげられる。ニュース記事では、病院では女性看護師は全員スカーフを着用することが義務付けられており、一部のメディアが「女性看護師の宗教の自由が奪われている」と批判していることが述べられている。その一方で記事には、実際に病院で働いている女性看護師の「病院の制服だと思っている」との意見も掲載されている¹¹⁾。スカーフ着用に見られるようなメディアのイスラーム批判は、欧米の極端でかつ差別的なイスラーム観に追従していることを窺わせるものである。

3.2. 首都ラパスにおけるムスリムたち

首都のラパスには、フィールドワーク当時二つのモスクおよびムサッラーがあった。そのうち、Asociación Islamica de Bolivia Mezquita As-salamを訪れた。

一軒家をモスクにしており、看板に「مسجد السلام (マスジド・アッサラーム)」とアラビア語で礼拝施設名が書かれてあった。このモスクにて、ボリビア国内で初めてアラビア文字の表記を目にすることとなった。

入り口横にある部屋に通された。ラマダーン¹²⁾ 期間中の金曜日に行ったこともあってか、

筆者が通された小さな部屋には、総計10名ほどの女性ムスリムたちがいた。そこは女性が集まっていただけであって女性専用の部屋には見えない。というのは、男性の出入りがよくあり、かつこの部屋を通らないと奥にある礼拝室へ行くことはできないからであった。イマーム¹³⁾ は常駐しているわけではなく、調査当時はラパスにも居住していなかった。その場にいあわせた女性ムスリムによれば、その理由はコミュニティが小規模のためであると言う。だが、管理・運営は他のイスラーム団体に頼ることなく独自に行っているとも述べていた。

このモスクでAさんと言うボリビア人女性ムスリムを中心に数名の女性ムスリムにインタビューをすることができた。以下は、彼女と彼女の側にいた女性ムスリムたちの述べたことである。

ボリビアにおけるムスリム人口の総数は、当時は1,000人程度であった。だが実際の数は良く分かっていない。それはモスクでの信徒の登録制を取っていないからである。この人数のうち大半が女性であり、改宗の動機は人によって様々であると言う。Aさんの改宗動機は、インターネットである女性ドクター（筆者注：Aさんの述べたまま記載）を知りイスラームに興味を持つようになり改宗したと述べた。女性ドクターはスカーフを着用していない人であるが、イスラームに精通しており、彼女からイスラームが何であるのかを教



モスク前景（出典：小村明子撮影）→

わったとAさんは言う。

なお、日本人のイスラームへの改宗者は、主に外国人ムスリムとの結婚を理由にする人びとが顕著である（小村 2015: 79 - 81、114）。つまり、改宗の一番の動機は「結婚」である¹⁴⁾。では、ボリビアでも同様のことが言えるのだろうか。

Aさんはそうとは言い切れないと述べる。現に、この場に集まっていた女性10人のうち結婚による改宗者は2人だけであった。ではイスラームをどの様にして知ったのであろうか。それは「インターネット」であると言う。Aさんの場合、インターネットで色々と検索をしていった中でイスラームを知ることができたと述べる。またイスラームを理解するのは、その後様々なムスリムとSNSを通して会話していくことにあるとも述べる。

では改宗後、彼女たちは如何にムスリムとしてイスラームの教えに従う生活をしているのであろうか。ラマダーン時期のインタビューでもあったので断食について聞いてみると、断食はきちんと行っていると言う。また礼拝は人のため、そしてコミュニティのために行っていると言う。

彼女たちのイスラームの知識と理解は、中東のムスリムたちが持っているそれと同様であると言えよう。食事のことを聞いてみた。彼女らによれば、ボリビア人は豚肉をよく食べているが、彼女たちはムスリムなのでもちろんイスラームの教え通り豚肉を食べることはないと言う。更に彼女たちは、ユダヤ教でもキリスト教でも豚肉は食べることはなかったが、その教えが忘れられてしまったのでイスラームが復活させたのだとも述べている。

ボリビアの宗教はキリスト教が主流であるが、イスラームとの違いを聞いてみると、イスラームもキリスト教も共に一神教であるが、キリスト教との違いはイスラームには三位一体が存在しないことであると述べた。とりわけAさんは、キリスト教の「三位一体」に疑問を感じて改宗した人であって、絶対的な存在としての神を求めているよ

うであった。彼女は「すべてのものの奥には神(Dios)が存在する（筆者注：すべては神の御業である）」と述べた。しかし、同時にこう付け加えた。「だが、キリスト教におけるイエス・キリストのような存在は間違いであり、逸脱（筆者注：アラビア語で「ビドア」という）である。」

彼女たちの中には、ボリビア人改宗者もいれば、移民としてこの国にやってきた外国人もいた。これは男性においても同様のことが言える。しかしながら、モスクに来てイスラームを勉強し、またはアラビア語講座やバザーに参加するなどの積極的な行動は、男性よりも女性が主体であると言う。インタビューを行った日も金曜日ではあるが、男性よりも女性の方が多くモスクに来ていたのは、彼女たちの言葉を裏付けていると言えよう¹⁵⁾。

このモスク以外にも、ラパス市内にはもう一か所ムサッラーが存在する。Aさんによれば、調査当時にモスクと呼ばれるのはラパスとサンタクルス¹⁶⁾の2か所のみで、ムサッラーは、スクレ、コチャバンバ、ラパス、サンタクルスの4か所にあると言う。また、サンタクルスにあるモスクは、中東に見られるモスクと同様の立派な建造物であると言う。そこで、サンタクルスのモスクについて調査することにした。

3.3. サンタクルスのモスクについて

ボリビアでラパスと肩を並べる経済都市であるサンタクルスは、人口約150万人の大都市である。近くには、日本人の移住地である「コロニア・オキナワ」や「コロニア・サンファン」があり、日系人も多く住んでいる。サンタクルスの中心部から10分ほどタクシーで行った所にそのモスクはあった。

Centro Islamico Bolivianoという名のモスクである。1974年に調査当時のイマームがパレスチナからボリビアに移住したことがきっかけである。イマームはもちろんパレスチナ人である。またイマームの妻はボリビア人で、イマームとの結婚によってイスラームに改宗した人である。彼女から

ボリビアへ移住することになった経緯を聞くことができた。

彼女はイギリス・ロンドンにある大学に留学した。そこで、イマームである今の配偶者と知り合った。ロンドン在住時につきあうようになったが、その時はまだムスリムではなかった。後に、結婚してパレスチナに渡った。配偶者の家族と共に生活をするためであった。彼女によれば、それは1967年か1968年の時であったと言う。この時期は、第3次中東戦争（1967年6月5日～10日）があり、その後イスラエルがガザ地区およびヨルダン川西岸地区などを占領下に置いた時期である。彼女の説明では、パレスチナには5, 6年住んだが、その後ヨルダンに移住、妊娠している時に一時的にボリビア・サンタクルスの自分の実家に戻り、この時に自分の家族に相談してボリビアに移り住んだと言う。

またイマームによれば、ボリビアに来た当初は、4人の女性ムスリムたちと礼拝していたと言う。1994年に現在のモスクが建設され、現在では金曜礼拝のために男女含めて50人ほどが集まるのだと言う。

このモスクでは、「New Muslim クラス」と「アラビア語クラス」、「Islamic Culture クラス」

の講座があり、モスクでの活動¹⁶⁾の一端をなしている。アラビア語クラスはイマーム自身が先生となっている。イマーム以外にも更に1人の先生がいるが、大学でも教えているため常勤ではないと言う。また「Islamic Culture クラス」では、歴史、地理、政治、イスラームなどを教えるが、クルアーンやハディースもこのクラスで教えている。主に子供たちにイスラーム教育を施す場となるイスラーム学校はボリビアには調査当時は開設されていなかったため、このクラスがイスラーム学校となっている。

またモスクでは、「ダアワ」と呼ばれるイスラームの布教活動も行われていた。昔はチラシを道行く人に配り、モスクがある地域の住宅のポストに投函するなどして布教活動を行っていたと言う。現在は、大学や学校でイスラームを教え、モスクに来た人たちに対してイスラームの教えを説くなどの布教活動を行っている。

また、以前サンタクルス市内にハラール・レストランを出していたが、現在はレストラン事業から撤退したと言う。その理由は、「ハラール」と表示する限りではアルコール類を取り扱うことができない一方で、地元では食事と共にアルコールを嗜む人びとが多いことから、客足が遠く要因



Centro Islamico Bolivianoのミナレット(尖塔)とドームの先端部分

(出典：小村明子撮影)



となったからである。では、ハラール肉はどのようにして入手しているのか聞いてみると、ムスリムであるし、彼ら自身でイスラームの教えに基づいてと畜し、ハラール肉としてモスク内で売り出していると言う。イマームによれば、どこから仕入れるのか色々調べるより自分でと畜する方が簡単であると述べていた。また、街中では豚脂などを含む豚由来の食材が料理に入っていることが多く、なかなか外で食べることが難しいので自分たちで調理すると言う。

このモスクでは、イマームから様々なムスリムの話を聞いた。例えば、生まれながらのムスリムであるにもかかわらずイスラームの教義に全く興味を示さなかったが、ある日突然「宗教において生まれ変わった」ムスリムや、若きボリビア人女性改宗者の話などである。そこで、モスクを訪れるボリビア人ムスリムにインタビューを行った。このうち一例として、下記にあるボリビア人女性改宗者へのインタビューを要約して記述する。

Bさん（女性 調査当時 24 歳 法学部大学生）



ハラールの鶏肉を扱っていることを記した張り紙
(出典：小村明子撮影)

Bさんは、将来弁護士になることを目指している、2008年10月にイスラームに改宗した女性である。家族、特に父親が厳格なクリスチャンである。彼女は神は信じるが聖人は信じていなかった。また、イエス・キリストが神の子であるというキリスト教の教えに対しても疑問を感じていた。彼女はインターネットで様々な宗教を調べ、様々な人びとと対話を行っていった。モルモン教にも神秘性を感じていたが、最終的にはトルコ人やアルゼンチン系ムスリムたちからクルアーンの教えを知り、イスラームに興味をもつようになって改宗したと言う。

改宗当初は自宅で礼拝を行っていたが次第にこのモスクに行くようになった。今はイマームの作る料理を手伝い、自分の時間があればバザーに参加している。だが、昼夜バイトをして働いていることもあって、それ程活動に参加できないと言う。

Bさんの家族はイスラームへの改宗に同意しているのだろうか。その質問を彼女に投げしてみた。彼女は現在兄弟と一緒に住んでいるが、家族は彼女の改宗に基本的には合意しており、彼女自身の意思に基づいて改宗しているので、特別に気にしていないと言う。

また今後働いたときにムスリムであることに支障があるかどうか聞いてみたところ、ボリビアは多宗教国家として複雑であるので、スカーフを着用しても自分がムスリムであるという説明は必要だが文化の違いとしてうけとめられ、石を投げられるような排斥行為に遭遇することはないと述べていた。

最後に、彼ら以外にも改宗理由を述べているボリビア人ムスリムが複数いるので、そのうち2名を取り上げ、以下に要約して紹介する¹⁷⁾。

Cさん（女性 サンタクルス在住 薬学部学生）

母親がアラブ人の家系であり、家族はキリスト教徒であった。また、自分はカトリック系の女子

学校で勉強をし、後に福音派の学校で学んだ。18歳の時に一つの神の存在について考えたがわからず、神の本来の姿を想像することに全く理解できなかった。ある日、母親と一緒に話をしていた時のことだった。自分の母方の祖母や先祖について質問をし、彼らがアラブ人であり、ムスリムであることを知って衝撃が走った。イスラームについて質問をしたくなり、その回答を求めて町にあるモスクに駆け込んだ。そこでイマームと話をし、イスラームに興味を覚えた。イスラームについて知るうちに、自分の信仰と自分の生き方に見合っていたのでイスラームに改宗した。

Dさん（男性 大学生）

9.11 テロ以降に「イスラーム」や「ムスリム」という言葉がキーワードになり、過激派についてのニュースが繰り返されるようになった。だが、イスラームにおける過激主義とは何であるのか、またイスラームとはそもそも何であるのか、疑問がわいてくるようになった。その時、2002年5月のある日のことで、当時19歳であった。正しいイスラームを求めて図書館や雑誌などで調べたがよくわからず、ムスリムたちの肉声も聞けないままイスラームを理解できずにいた。自分の住んでいる町にモスクがなかったので、イスラームについてインターネットで調べていたところ、少しずつではあるがその本質が分かってくるようになった。特に、シャリーア¹⁸⁾に感銘を受けた。その理由は、善行者には良い原理であり、非常に理性的であるからである。だが、私のイスラームに関する疑問に答えているわけではなかった。

ある日、自分の町にいるムスリムに直接コンタクトしたいと思い、サンタクルスにあるモスク（筆者注：Centro Islamico Boliviano）に書面で連絡をした。そこでラパス在住のムスリムの誰かに自分の住所と電話番号を教えてコンタクトをとってくれるように頼んだ。その結果、ひと組の夫婦の電話番号を知ることができた。ある金曜日に会う約束を取り付け、彼らは私と最初に接触し

たラパス在住のムスリムとなり、私の助けとなった。更に、イスラームについての本やパンフレットをくれた。頂いた本のおかげで、非常に具体的にイスラームを知り、特に祈りと五行¹⁹⁾について知ることができ、その後改宗した。

4. 考察

まずは南米全体のイスラームの状況について考える。総じて、現在の南米のムスリムは、(1) プランテーションにおける労働力補充のための植民地間での移民政策と、(2) 1850年代以降に見られた移民、すなわちオスマン帝国時代の、主にパレスチナ地域からやってきた移民の子孫が多いことが言える。また南米に渡ったムスリム移民たちの多くが彼らの子孫にイスラームを継承できなかったまま現在に至っている。言い換えれば、家族の宗教としてのイスラームが子孫にまで浸透しておらず、継承できずに途絶えていることが言える。

ボリビアにも同様のことが言える。ボリビアのムスリム人口は1,000人程度である。しかもボリビア国内の外国人ムスリムの就業形態によっては一都市に定住せず他の都市に移住するように移動性が高いことが考えられる。したがって、ボリビアのイスラームはボリビア人改宗者だけでなく、結婚やビジネスなどの様々な理由により現地に定住している外国人ムスリムたちや彼らの子どもたちによって、今後の国内におけるイスラームの定着度やモスクの開設などのイスラーム的な環境の整備の進展が左右されることになるだろう。

また、イスラームへの改宗理由は人それぞれであるが、ムスリムたちへのインタビューやインターネットに掲載されている改宗理由から知り得た範囲では、改宗ムスリム本人や彼らの家族が信奉する宗教（主にキリスト教）において疑問を持ち、心の平安を何も見出せなかった経緯が改宗の背景にあることである。彼らの改宗はキリスト教との比較によるものである。言うなれば、彼らが

彼ら自身の信条に見合った宗教を追い求めた結果がイスラームであったことを示唆している。

更にボリビアの場合、国内に滞在する外国人を含んだムスリム人口が少ないため、コミュニティとしては決して大きくはない。その上、ボリビア国内における社会的存在としては目立つものでもない。つまり、非ムスリムのボリビア人は日常の社会生活においてイスラームに触れる機会に恵まれない状況にあることが言える。昨今ではボリビアとイランとの政治経済方面からの関係が強くなっているが、あくまで政治経済における関係性であって、イランとの関係性が強化されることでボリビア国民が自分たちの生活の中にイスラームを身近に感じることを意味するわけではない。それ故、ボリビア人がイスラームを知って理解するのは、外国人ムスリムや改宗ムスリムという身近な存在の有無と、インターネットという2つの手段が有効となる。

現在のボリビア人改宗者の特徴は、インターネットによるイスラームとの出会い、およびその知識の獲得にあると言えよう。この状況は、ヨーロッパや日本のようなイスラーム（ムスリム）との直接の邂逅をきっかけにすることによる改宗とは異なる点で、ボリビアの特徴と言えよう。つまり、ボリビア人改宗者が学んでいるイスラームは、ボリビアや南米の宗教文化と融合したイスラームではないのである。

彼ら改宗者は直接の邂逅をしなくとも、現地の文化や宗教と土着化していない、ムスリムが多数派となる中東・イスラーム地域で行われている「正しい」イスラームを容易に知ることができる。また、インターネット検索やSNSのチャットで他のムスリムと議論することによって納得した上でイスラームに改宗するという点では、国や地域を越えた、いわゆる「宗教のグローバル化」と言えるだろう。

ただし、このような状況はムスリム・アイデンティティにおける疑問を呈することになる。ボリビア人改宗者の事例のようにイスラーム（あるいは

ムスリム）との直接の邂逅を見ない改宗は、あくまでもインターネット上で知り得たイスラームを前提として今後ムスリムとして生活していくことになる。ムスリムが少数派となる社会において、日常生活という現実世界の中で、果たしてムスリムとしてのアイデンティティをどの程度保持できるのだろうか。現に、19世紀から20世紀初頭において南米に移住したムスリムたちは子孫にイスラームを継ぐことができなかった。このような疑問については、ムスリム個人がイスラームを自分の宗教として維持していこうとする意志の強さに依るところであると答えることはできる。だが改宗者の事例に見られたようにムスリム・アイデンティティを維持するためには、他のムスリムとコミュニケーションをとろうとしてモスクに行き、出会いを求めて他のムスリムと連絡をとることもまた重要な要素となる。

サンタクルス市のモスクでは、新たに改宗したボリビア人ムスリムたちやサンタクルス在住の外国人ムスリムたちが礼拝や勉強のために通っている。モスクに通うことのできる地域に居住しているムスリムたちは、モスクで他のムスリムと出会い、コミュニケーションを取ることでムスリムとしてのアイデンティティを維持することはできるだろう。しかしながら、近場にモスクやムサラアといった他のムスリムたちが参集し、時間を共有する機会が得られないムスリムたちはどうすればムスリムとしてのアイデンティティを維持できるのだろうか。結局のところ、家族にムスリムがいる場合は家族単位で、もしくはインターネットのチャットなどによって他のムスリムと対話し、コミュニケーションをとっていかざるをえない。

インターネットでのムスリムとのコミュニケーションは、目の前にいる人物を相手にしているわけではない。インターネットでコミュニケーションをとっている人物はコンピューターを通した二次元としての存在である。だがチャットやメール、SNSなどによる交信は、ムスリムが少数となる

地域でイスラームを知る機会に恵まれない、あるいは身近にムスリムの存在がない場合、イスラームを容易に知ることができる意味で非常に重要な布教媒体となる。

こうしたインターネット上でイスラームの知識を共有し、かつ地域を瞬時に超えてムスリムとオンライン上で会話することは、長い年月をかけて土着化した地域性のあるイスラームとは異なったイスラームの広がりを見せることになる。また、彼らが共通の知識や考えを共有することによってイスラームを実践できるという視点から、このような状況は「The internet virtual ummah (インターネット・バーチャル・ウンマ)²⁰⁾」と呼ぶことができるだろう。

インターネットの使用による知識の共有は、インターネット接続環境の有無と外国語ができるなど識字の問題あるいは第二言語の習得率にも関係する。だがその問題を克服すれば、ムスリム移民やその子孫、国内在住の外国人ムスリムの存在に頼ることなく、インターネット上で情報を得て、知識だけでなく理解に導くことも可能となる。まさに世界規模で布教できる良い媒体となるが、問題点も浮き彫りになる。ホームページで意見を述べる人びとが、その個人のイスラームについての知識とイスラームに関する考えを伝えることができるため、土着の文化や宗教と融合したイスラームが広まらなくとも、独自の解釈に基づいたイスラームの教えが広まる可能性が高くなる可以说ではないだろうか。さらに、どの国や地域のムスリムあるいはイスラーム知識人のホームページを見て、かつ彼らとSNSなどで対話してイスラームの知識を得るのかによってもまた、閲覧者がどの程度感化されるのか、その程度が異なると言えよう。すなわち、預言者ムハンマドの言行録であるハディースやシャリーアに精通するイスラーム知識人などのホームページに掲載される内容や彼らとの対話によって、閲覧者にイスラームに改宗する機会を与え、かつ新たな改宗者の言動や思考形成が左右されることも予想できるので

ある。今後インターネットによる布教活動は、今まで見られた直接の邂逅によるイスラームへの改宗や地域の伝統や文化と融合したイスラームのあり方を根本から覆すことにもなるかもしれない上、今後のインターネットのさらなる進歩も注視する必要があると言えるのである。

5. おわりに

ボリビアの場合、19世紀末の中東からの移民時代から1989年にイスラームが国に正式に宗教として認められるまでの期間は、確固としたムスリム・コミュニティの存在が明記されていなかった。歴史研究においても、現地の宗教となったキリスト教に改宗したムスリムは記載されているが、どの程度のムスリム移民がいたのか実態が明確に記されていない。このように、移民史の中でムスリム移民の存在は確認できるが、当時のボリビア社会では、ムスリムとしての存在が認められていたわけではなく、あくまで「中東地域からの移民」としての認識であったと言えよう。ムスリムの存在が社会に認められるのは1974年以降であり、ムスリム側からの資料でも、この時期からであることを述べている。またイスラームがボリビアの社会制度の中で認められるのは、1989年という20世紀も後半にさしかかった遅い時期であった。これは、ボリビア社会の信教の自由が保障されていることやムスリムたちの努力によって、イスラームがボリビア社会にしだいに定着していったことを物語っていると言えよう。

また、近年におけるボリビアのイスラームの状況は、国内でのムスリムとの直接の邂逅が得られなくとも、改宗者を生んでいる様相を呈している。インターネットによってイスラームの知識を得て、その後改宗に至ったムスリムの事例が複数見られるからである。この事実は南米という遠い地域においてもイスラームが着実に知られており、拡大を見せていることを例証するものと言えよう。

注

- 1) 宗教の土着化に関しては、キリスト教史における信仰の土着化をめぐる議論（マリズ 2005）などやナショナリズムに関する議論（小原 2008）などがある。
- 2) 簡易礼拝室のことである。オフィスビルの一室やレストランの一角をそのまま礼拝室として活用しているところが多い。
- 3) 世界のムスリム人口に関するこの報告書は、アメリカ合衆国の調査機関によるものである。同報告書では数値の引用先を掲載しているが、筆者は諸地域のムスリム人口にかなりの誤差があると考えている。というのは、日本のムスリム人口は約 18 万人を記載されているためである。ほぼ同時期となる 2010 年末には、実際の人口数は 11 万人程度とみなされている（店田・岡井 2015: 2-3）。ただ本研究ノートに同報告書のデータを使用した理由として、他のデータにおいてもかなりの誤差があると捉えることができるためである。例えば、U.S. Department of State, 2019 Report on International Religious Freedom によれば、各国の総人口数は全て 2019 年半ばを使用しているのに対して、各国のムスリム人口数は 2010 年から 2017 年とまちまちである。したがって総人口数との年数差の少ない同報告書のデータを使用した。
- 4) U.S. Department of State: 2019 Report on International Religious Freedom: Argentina (2021 年 1 月 22 日取得, <https://www.state.gov/reports/2019-report-on-international-religious-freedom/argentina/>)。
- 5) カルロス・サウル・メネム（大統領任期 1989 年～99 年）は、シリア系アルゼンチン人である。アルゼンチンでは、大統領はカトリック教徒でなければならなかったため、彼は大統領就任にあたってイスラームからカトリックに改宗した。なお、彼の父方の祖母は預言者ムハンマドの直系の子孫にあたると言われている（Jozami 1996: 67）。
- 6) U.S. Department of State の Argentina / International Religious Freedom Report 2008 によれば、アルゼンチンのムスリム人口（50～60 万人）のうち、スンナ派が 70%、シーア派が 30% を占めていると言う（2020 年 12 月 1 日取得, <https://2009-2017.state.gov/j/drl/rls/irf/2008/108511.htm>）。
- 7) インドネシアのジャワ島から、1891 年から 1939 年にかけてほぼ毎年のように船でスリナムにやってきたと言う（De Waal Malefijt 1964: 149）。
- 8) この時期にパレスチナから中南米各地に渡って行った理由として、（エック 2005）によれば、ただ単に経済的な機会があったからにすぎないとしている。確かにこの時期には行商のために、アメリカ大陸各地に渡るシリア人やレバノン人が多かったことが言われている。ただし、商売のためだけではなく、貧困やオスマン帝国による圧政を逃れるためなどの理由も移民の子孫たちから様々に言われている。筆者の意見として、筆者はオスマン帝国時代の中東側からの文献を調べる必要があると思われる。
- 9) 2009 年 9 月 7 日 Asbún-Karmy 氏へのインタビューによる。なお彼によれば、近年ボリビアへとやってくる海外の移民たちは半永続的な移住ではなく、別の地域（あるいは国）に移住する傾向にあるという。
- 10) インターネット配信のニュース記事「Iran's Leader Gets Backing in Friendly Bolivia.」などを参照のこと。これらのニュース記事は、近年においてもイランとボリビアとの良好な関係を伝えている。なお Open Source Center Report (ed.) によれば、首都ラパスにはシーア派のイスラーム団体が 4 つあると言う（2020 年 12 月 1 日取得, <http://www.fas.org/irp/dni/osc/bolivia.pdf>）。
- 11) 「Bolivia: Women hired by the Islamic hospital must wear a veil.」の記事による（2010 年 2 月 10 日取得, <http://momento24.com/en/2009/11/27/bolivia-the-women-hired-by-the-islamic-hospital-must-wear-a-veil/>）。
- 12) ラマダーンはイスラーム暦 9 月にあたる。これはムスリムたちが断食をする期間であり、子供・妊産婦・病を患っている者以外は、日中断食をしなければならない。
- 13) 「イマーム」とは、通常ムスリムの集団を束ね、集団礼拝の時に最前列に立って礼拝の手本を示す者のことで、礼拝の知識さえあれば誰でもなることができる。ただし、ムスリムが少数派の国においては、クルアーンなどイスラームの知識を持つ者やモスクの管理・責任者のことを「イマーム」と尊称する場合もある。

- 14) イスラームの教義では「啓典の民（ユダヤ教徒およびキリスト教徒）」以外の一神教徒及び多神教徒と、ムスリムとの結婚は認められない。また女性ムスリムの場合は「啓典の民」との結婚も認められていないので、例えば配偶者となる男性がキリスト教徒であっても、イスラームに改宗しなければならない。
- 15) 男性は、神聖な曜日である金曜日の昼間にモスクに集って一緒に礼拝をする「金曜礼拝」が義務となっている。言い換えれば、金曜の集団礼拝時にモスクを訪れる女性の数のほうが少ないのが通常である。
- 16) モスクではこれ以外にチャリティーバザーを開き、集まったお金で貧しい人たちに食べ物を配布し、貧困家庭の子供たちを学校に行かせる活動を行っている。
- 17) インターネットサイト「Islamweb.net Español」（2020年12月1日取得、<https://www.islamweb.net/es/>）より抜粋。
- 18) シャリーアは、イスラーム法のことである。家族法や財産法などの具体的な法律はこのシャリーアに基づいて規定されている。
- 19) 五行とは、イスラーム信仰の基礎となる5つの行いのことで、信仰告白（シャハーダ；شهادة）礼拝（サラア；صلاة）、断食（サウム；صوم）、喜捨（ザカート；زكاة）、巡礼（ハッジ；حج）、である。
- 20) (Roy 2004: 183-84)。なお、「ウンマ」とは「イスラーム共同体」のことである。

引用および参考文献

Asbún-Karmy, L.A., 1993, *La Migración Árabe y Su Descendencia en Bolivia*, Santa Cruz de la Sierra, Bolivia.

Bolivia: Women hired by the Islamic hospital must wear a veil. (2010年2月10日取得, <http://momento24.com/en/2009/11/27/bolivia-the-women-hired-by-the-islamic-hospital-must-wear-a-veil/>)

Centro Islamico Boliviano ホームページ (2009年9月15日取得, <http://www.islamenbolivia.com>)

Centro Islámico Boliviano ed., 2004.: *Presentación General*, Santa Cruz de la Sierra, Bolivia.

Centro Cultural Islamico Custodio de las Dos Sagradas

Mezquitas Rey Fahd en Argentina, (2020年12月1日取得, <http://www.ccislamicoreyfahd.org.ar/>)

Chickrie R., *The Lalla Rookh: Arrival of the First Hindustani Muslims to Suriname 1873* (2020年12月1日取得, www.guyana.org/features/LallaRukh.pdf)

De Waal Malefijt, A., 1964, "Animism and Islam among the Javanese in Surinam," *Anthropological Quarterly*, 37(3): 149-55.

エック, ダイアナ・L, 2005, 『宗教に分裂するアメリカ——キリスト教国家から他宗教共生国家へ』池田智訳, 明石書店.

藤原聖子, 2009, 「レポート ユーチューブに見るアメリカ宗教事情」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2009』166-75.

Gomez, M.A., 1994, "Muslims in Early America," *The Journal of Southern History*, 60(4): 671-710.

Islamhoy.org., El Islam en Latinoamérica, "Mezquita de Bolivia" (2020年12月1日取得, http://www.islamhoy.org/principal/lugares/lugares/11_mezq_y_ci_boliviano/main.htm)

Islamic Finder, (2020年12月1日取得, <http://www.islamicfinder.org/cityPrayerNew.php?country=Bolivia>)

Jozami, G., 1996, "The Manifestation of Islam in Argentina," *The Americas*, 53(1): 67-85.

小村明子, 2015, 『日本とイスラームが会おうとき——その歴史と可能性』現代書館.

Lofaso, V., 2016, "Argentina's Muslim Minority," Council on Hemispheric Affairs (2020年12月1日取得, <https://www.coha.org/argentinas-muslim-minority/>)

Los Musulmanes: The Spanish Ummah of the Muslim World, (2020年12月1日取得, <http://www.islamaawareness.net/LatinAmerica/spanish.html>)

マリンス, マーク・R, 2005, 『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』高崎恵訳, トランスビュー.

モロー, ヨセフ, 1999, 「コロンブス以前からアメリカに住んでいたムスリム」『アッサラーム』81: 25-30.

小原克博, 2008, 「信仰の土着化とナショナリズムの相関関係——「宗教の神学」の課題として」『基督教研究』70(2): 55-71.

- Open Source Center Report ed., 2009, *Bolivia-Key Muslim Converts Asset Local Peril, Ally with Zealots Abroad* (2020年12月1日取得, <http://www.fas.org/irp/dni/osc/bolivia.pdf>)
- Osterweil, M.J., 1998, "The Economic and Social Condition of Jewish and Arab Immigrants in Bolivia, 1890-1980," Ignacio Klich and Jeffrey Lesser eds., *Arab and Jewish Immigrants in Latin America: Images and Realities*, London: F. Cass, 146-66.
- Roy, O., 2004, *Globalized Islam: The Search for a New Ummah*, New York: Columbia University Press.
- The Pew Forum on Religion & Public Life ed., 2009, *Mapping the Global Muslim Population*. (<http://pewforum.org/newassets/images/reports/Muslimpopulation/Muslimpopulation.pdf>)
- 店田廣文・岡井宏文, 2015, 「論説 日本のイスラーム——ムスリム・コミュニティの現状と課題」文化庁文化部宗務課編『宗教時報』119: 1-22.
- U.S.Department of State, *2019 Report on International Religious Freedom: Argentina* (2021年1月22日取得, <https://www.state.gov/reports/2019-report-on-international-religious-freedom/argentina/>)
- Valdez, C., 2009, "Iran's leader gets backing in friendly Bolivia," *The SanDiego Union-Tribune* (2020年12月1日取得, <https://www.sandiegouniontribune.com/sdut-irans-leader-gets-backing-in-friendly-bolivia-2009nov24-story.html>)